

# 参加型トイレづくりの効果と学校トイレの役割

学校のトイレ研究会事務局長 高嶋弘明

## 1.5 K トイレの払拭と学校の再生

1996年の夏に、学校のトイレが子どもたちから5K(汚い・暗い・臭い・怖い・壊れている)と嫌われ、また排便をすると冷やかされたり、いじめられたりすることから、排便を我慢する子どもが多く、子どもたちの健康に及ぼす悪影響を懸念する新聞記事を目にしたことが、「学校のトイレ研究会」設立の動機でした。子どもたちが安心して使用できる、清潔で明るく快適なトイレづくりの実現を目指して、冊子の発行やフォーラム・セミナーの開催、講演活動などを10年間行ってきました。

私たちの活動に賛同いただいた東北から九州までの公立小学校18校のトイレ調査を1996年末から実施したのをかわきりに、冊子の取材や講演などを通じて100校以上の学校を訪問し、教育委員会や教職員の人たちから学校が抱えるさまざまな問題を聞いてきました。その中で「トイレが荒れると学校が荒れてきます。トイレは学校を映す鏡です」と話された校長たちの言葉に、老朽化したトイレが、子どもたちのいじめや、施設の損壊、ひいては学校の荒廃を引き起こす間接的な要因になっているのではないか。トイレをはじめ学校の環境を良くすれば、学校生活がもっと快適になり、「いじめ」や「破損行為」をなくし、学校を蘇らせることができるのではないかと思うようになりました。

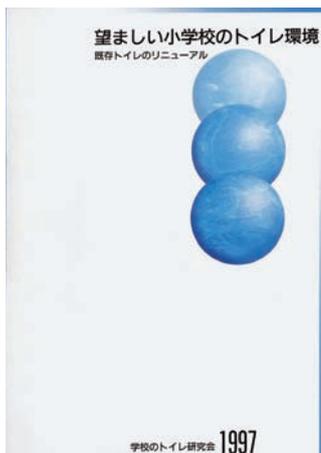
確信を持つようになったのは、1998年に神戸市教育委員会と日本トイレ協会主催による「学校トイレ文化フォーラム IN 神戸」のイベントのひとつ、全国の小中学生を対象にした「学校トイレ作文コンクール」でした。

2千数百の応募作の中には、後にNHK教育テレビの「中学生日記」でドラマになったすばらしい作文もありましたが、私の目をくぎづけにしたのは、東北地区のある知的障害児施設の子どもの作文と先生の添え書きでした。添え書きには、施設の子どもたちに「トイレのことを書いてみる？」と話したら、通常は文字を書くことを嫌う子どもたちが、全員書いてくれたとのことでした。大きなマス目の原稿用紙に書かれた作文は文章にはなっていませんでした。中には絵を書いた子どももいました。自分の思いを文章にすることが不得手な彼らが書いた文字や絵からは、どの入選作文にもましてトイレに関する強烈な思いが伝わってきました。

このことから私は、学校で問題を起こしている子どもたちもトイレは清潔で快適な場であって欲しいと思っているに違いない。また勉強が不得手な子どもたちや目立たない子どもたちも、トイレ改善に関しては意見をいえるに違いない。子どもたち全員が願っていることをみんなで議論し解決していくことは、コミュニケーションによる信頼関係の醸成と、連帯感を育むのではないか。またトイレ改修の企画段階から子どもたちに参加してもらえば、健康、環境、福祉、歴史、建築、地域社会など、さまざまなことをトイレから学ぶことができるのではないか。さらに子どもたちは全員が参加し、完成した清潔で明るく快適なトイレを目の当たりにしたとき、完成の喜びを共有し、トイレに愛着を持ち大切に使用してもらえるのではないか。児童・生徒参加型トイレづくりは、学校を再生させるのではないかと思うに至りました。

Vol.1/1997

「望ましい小学校のトイレ環境」  
～既存トイレのリニューアル～  
小学校トイレの実態調査レポート  
トイレ計画のチェックポイント  
新しいトイレづくりの提案  
トイレリニューアル事例  
藤沢市鶴沼小学校  
新宿区立西戸山小学校



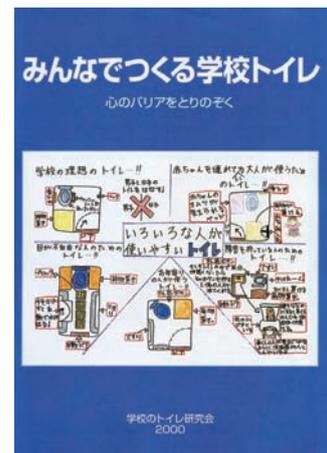
Vol.2/1998

「明日の学校トイレ」  
～子供たちの要望に応える 小・中学校の  
トイレづくり～  
こんなトイレがほしい  
小中学生のヒアリング  
こうして改修した私たちのトイレ  
藤村女子中学校、金沢市立鳴和中学校  
これからの学校トイレ計画  
予条件の整理からメンテナンス計画まで



Vol.3/2000

「みんなで作る学校トイレ」  
～心のバリアをとりのぞく～  
人間工学の立場から考える学校のトイレと  
バリアフリー (千葉工業大学 上野義雪)  
世田谷区学校トイレ改修プロジェクトに参画して  
事例レポート / 東京都世田谷区、横須賀市、  
京都市  
/ 東大阪市繩手小学校、  
佐賀県神埼中学校



## 2. 効果が大きい参加型トイレづくり

参加型トイレづくりを実践した教育委員会と学校の取り組みは、過去に発行した冊子でも紹介してきましたが、単なるトイレ改修から参加型トイレづくりによる学校の活性化、さらに本誌で掲載した戸田市のように、まちづくりの一貫としての取り組みへと、学校トイレへの役割と期待が大きくなってきました。2004年に学校のトイレ研究会が、全国の区・市・町教育委員会に実施したアンケート調査では、12%の自治体が子どもたちの意見を反映したトイレづくりを行っており、その輪は着実に広がっています。

参加型トイレづくりの手法に定番はありませんが、流れは大きく次の4つになります。

- ①問題点の抽出（興味・関心をいどく）
- ②解決策の検討とイメージづくり（主体性・創造性を培う）
- ③完成の喜び（共感・感動を得る）
- ④大切に使う心（公德心の芽生え）

また、参加型トイレづくりは「総合的な学習の時間」のテーマとしても成果が期待できます。「総合的な学習の時間」は、自ら考え、実践する学びのプロセスともいわれていますが、学校生活で子どもたちや教職員全員の困りごとを、単なる改善でなく自分たちが希望する状態に新しく劇的に変えていくことは、子どもたちだけでなく誰もが胸をときめかせながら取り組むことができるテーマです。まず、現在使用しているトイレの問題点を探ることから子どもたちはトイレに関心を持ちます。次にどのようなトイレにするのか、プランニングの段階で障害を持った子どもや地域の人たちも使うことを想定して、バリアフリーやユニバーサルデザインを学び、福祉や人権の問題を理解することができます。便器や洗面器の節水や下水処理を学ぶことで、身近な環境問題を学ぶことができます。

さらに古代文明都市の遺跡に水洗トイレの遺構があることや、国や文化によってトイレが異なることから歴史や国際を学ぶことができます。このようにトイレは教材の宝庫でもあります。

最後に子どもたちは完成の喜びをみんなで分かちあい、みんなで作ったトイレはいつまでも大切に使うという公德心が芽生えます。

参加型トイレづくりを行った学校から、さまざまな成果が伝わってきます。トイレ改修の委員会に応募して、活動した児童が、完成後に彼らの取り組みを市内の弁論大会で発表したところ、入賞して、親や先生たちの目を見張らせたこと。美術の時間に子どもたちが制作したトイレのサインを、子どもたちに選んでもらったところ、日頃は目立たない子どもの作品が選ばれ、その後は積極的になったこと。トイレ掃除を怠っていた子どもたちが、一生懸命に掃除をするようになったことなどを聞くにつれて、参加型トイレづくりの効果を実感します。

## 3. 教育を支える人たちのチャレンジ

学校トイレの改善は、自治体や教育委員会の組織によるものだけではなくありません。PTAの有志による「トイレスタッフ」のトイレ美化活動に、子どもたちや先生方が参加するようになり、やがて学校を動かし行政を動かして、トイレの改修に結びついた小学校。市内の父兄と教師のグループによるセミナーの開催や、署名を集めた請願等が行政を動かして、市内の公立学校トイレの一連の改修に繋がったことなど、地域の教育に思いをよせる人たちの地道な活動も学校の大きな支えとなっています。

その中で、公立学校事務職員の有志で構成する山梨県教育財政研究会の活動をご紹介します。彼らは、山梨県内市町村の教育費実態調査や個人情報管理のあり方、危機管理など、教育財政をはじめ学校の課題についての問

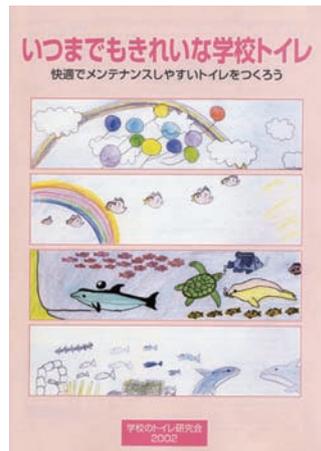
Vol.4/2001

「変わりはじめた学校トイレ」  
～学校から地域にひろがる環境づくり～  
環境向上への取り組み  
神戸山手女子中学高等学校  
福岡県山田市  
山梨県教育財政研究会  
山梨県甲西町  
追跡トイレ改修その後  
学校トイレのメンテナンス  
最新改修事例 / 郷荘中学校、和田小学校



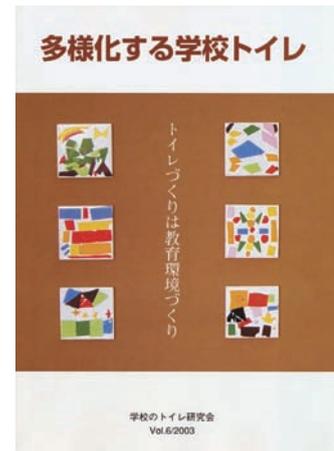
Vol.5/2002

「いつまでもきれいな学校トイレ」  
～快適でメンテナンスしやすいトイレをつくろう～  
さまざまに展開する学校トイレの改修…自治体の取り組み  
大分市、大阪府和泉市、鹿児島県金峰町  
学校トイレの器具、部材の正しい選び方  
最新事例 / 東京高等学校、相模原市夢の丘小学校



Vol.6/2003

「多様化する学校トイレ」  
～トイレづくりは教育環境づくり～  
富山県下のさまざまな活動  
富山市立光陽小学校、砺波市立出町小学校  
総合学園のトータルな試み…昭和女子大学  
各地の取り組み  
埼玉県松伏町立松伏中学校、  
茅ヶ崎市立松林小学校  
障害児に優しい学校の建物・設備の条件  
子どもたちの手による日常メンテナンスの方法



題提起や提言を、「豊かな教育を子どもたちに」と題する研究誌にまとめて、毎年県内の小中学校などに配布しています。トイレへの取組みは1997年に学校トイレを扱った新聞記事を編集会議で取り上げたのが始まりでした。この年から2年続けて、それまで見過ごしていたトイレの改善策などを現場の視点で提言しました。

翌年には、問題の深さを広く訴えるために教育関係者だけでなく、県民も対象にした「学校トイレセミナー」を山梨県で開催しました。新聞やテレビでセミナーが報道され、山梨県内でこの問題に関する認識が急速に広がり、トイレを見直す学校が増えました。トイレの改善に呼応するように校舎のガラスや施設の破損が激減し、その結果、予算に余裕が生まれ、余った修繕費で花を購入して教室に飾ったり、ミニ庭園をつくった学校もありました。

各自治体に共通する課題として、教育・環境・医療福祉・まちの活性化などがありますが、あらゆることの基盤をなすのが教育といわれています。学校が抱えている問題を、関係者だけでなく、広く地域の人たちに理解と協力を求めながら解決を図っていく、そのための研究誌での問題提起や提言、公開セミナーの開催は、これからの地域の中での学校のあり方を示しているのではないかと思います。毎年発行される「豊かな教育を子どもたちに」は、教育関係者だけでなく行政や企業においても参考になる研究誌です。

#### 4. 今後の課題 避難所としての学校トイレ

阪神・淡路大地震や中越地震では、避難所に指定された学校の水洗トイレが使用できずに避難者に苦渋を強いました。共同通信が中越地震の直後に実施した避難住民アンケートでは、避難所で改善して欲しい要望の内、トイレ改善の希望が極めて高く56%を占めました。またトイレを我慢するために水分を控え、エコノミー症候群を

引き起こす一因ともなりました。

このように、避難所の水洗トイレの機能の確保は飲料水や食事と同様に切実な問題になっています。日本トイレ協会が2006年に実施した「災害・学校トイレアンケート調査」によると、自治体の95%以上が公立学校を避難場所にしてはいますが、避難場所対策としてトイレ整備を行っている自治体は30%に過ぎず、整備の内容も災害用簡易トイレの備蓄や仮設トイレによる対応が中心となっています。したがってプライバシーの問題や、夜間や荒天時の屋外での使用など、高齢者や障害者、幼児だけでなく、健常者にも使いづらく、また自治体にとっては緊急時の仮設トイレの調達と汚物処理の問題が残されています。抜本的な対策を図るには、災害時でも機能するライフラインの構築による既設水洗トイレの活用が急がれます。

日本トイレ協会が2005年に自治体を対象に実施したアンケート調査では、すぐにも上下水道の耐震化を図り、水洗トイレの継続使用を図るべきと回答した自治体は23%に過ぎず、将来的には必要であるが現状では仮設・携帯トイレで対応すればよいとの回答が過半数を占めています。背景に自治体の財政事情がありますが、震災のたびに避難所のトイレ問題が指摘されながらも、抜本的な対策に踏み切れないことに、もどかしさを感じます。

上下水道本管や下水処理場だけでなく、校舎の建築時はもとより、トイレ改修時にバリアフリーと給排水管や継手の耐震化も図ると、避難時に校舎内のバリアフリートイレが使用でき、トイレの苦痛も緩和されます。財政支出をとまいませんが学校を教育の場としてだけでなく、地域の教育・文化・情報・福祉等の交流拠点とし、さらに避難所としての機能を付加して有効活用を図れば地域が活性化し、明るく、安心して住めるまちづくりへと発展して行くのではないのでしょうか。

Vol.7/2004

「レベルアップする学校トイレ」  
～Kの追放からQの追求へ～

自治体の取り組み

滋賀県栗東市、群馬県太田市、  
神奈川県横須賀市、東京都世田谷区

事例レポート

豊中市立千成小学校、三重県立津高等学校  
子どもたちと教職員が一緒に行う定期メンテナンスの方法



Vol.8/2005

「地域から生まれる新しい学校トイレ」  
～進む学校トイレのパブリック化～

トイレから変わる学校と地域

全国の区、市、町教育委員会アンケート調査  
災害時の避難場所、地域開放を踏まえたトイレづくりのケーススタディ

北海道、札幌市、呉市、宝塚市、宜野湾市  
みんなにやさしい学校トイレのつくり方  
照明計画のチェックポイント  
プロの手による特別メンテナンス



Vol.9/2006

「地域との絆を深める学校トイレ」  
～みんなが集まる学校に～

ユニバーサルデザインの学校づくり

岡山市教育委員会と学校の取り組み  
防災拠点施設としての小学校体育館改修

いつまでも明るく清潔なトイレづくりのための  
チェックリスト



# 既存の高等学校を新しいシステムの学校へ

学校トイレへの挑戦 / 福岡県



外観。校舎は市街地から一段上がった敷地に立地している。3期にわたる耐震補強工事が行われているが、第1期とともに教室棟のトイレが、第2期工事では渡り廊下脇の2カ所のトイレが改修された。

## 新しい教育システムへの取り組み

少子化や時代の変化に対応して、教育システムの再編が進められていますが、その中のひとつに「中等教育学校」があります、この名称になじみは少ないと思われるが、これまでの中学校と高等学校を併せた6年間を一貫して教育するための新しいシステムです。

福岡県では全国で5番目に当たる福岡県立輝翔館中等教育学校を平成16年度に創設しました。所在地はお茶の産地として知られる八女の黒木町で、県立黒木高等学校の既存校舎を過渡的に利用しています。かつては各学年6クラスあった黒木高等学校も少子化と過疎化の影響で現在では3クラスとなっており、現在では3クラス120人定員の輝翔館中等教育学校の生徒たちと同居しています。短期的とはいえ2つの学校が同居しなければならない状態のため、改修も慎重に計画され、3期にわたって実施されることになりました。その中で、トイレの改修は1期と今年度の2期で完了しました。

## 県と学校のトイレ研究会とがコラボレーション

福岡県内には100校以上の高等学校があり、老朽化した校舎は順次耐震補強をメインとした大規模改修工事が進められています。トイレの改修は大規模改修と併せて

行われていますが、基本的な機能を果たしていれば、既存機能を復元させることが基本的な方針です。

また、常に水事情に悩まされている福岡県では、学校に限らず日常的に節水は大きなテーマとなっており、トイレにおいても節水効果のある自動水栓や擬音装置などの機械的な設備は早期から導入されていました。また、教育環境向上のためにはヒヤリングを実施するなどの努力を重ねているにもかかわらず、なかなか実現には結びつかないのが現状でした。

このような背景と共に、輝翔館中等教育学校においては、これまでにはなかった中高一貫という新しい教育環境をどのように整えるかについて、新たな視点が必要となりました。

## プロジェクト発足までの経緯

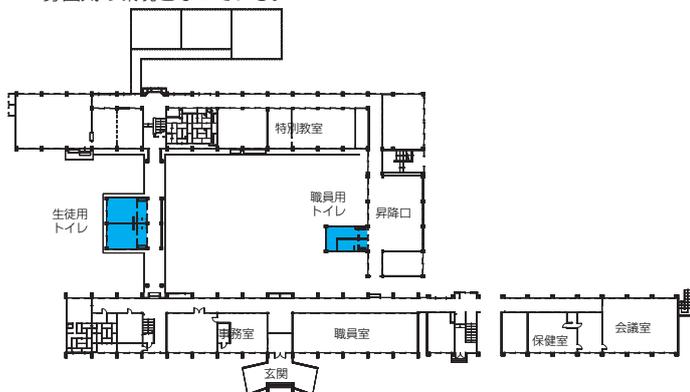
福岡県では、中高一貫教育学校の基本・実施設計が予定されていた2004年度、学校トイレが単なる排泄の場所としての役割以外に、「排泄の大切さ」や「公共トイレでのマナーを学ぶ場所」としての機能が求められているという社会背景を受けて、「トイレに焦点をあてた新たな教育的視点による意欲的な取り組み」が望まれていました。

本来、福岡県内の学校トイレ設計においては、すべて

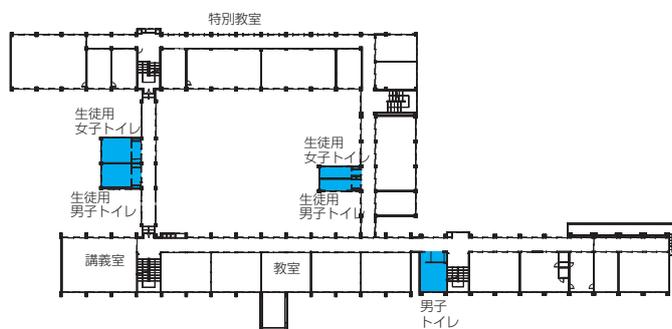


教室棟2階男子用トイレ入口の脇に設けられた多目的トイレ。全体的に内装に木材が用いられて、優しい雰囲気環境となっている。

男子トイレ入口。正面の目隠し壁の入隅には3つの棚が設けられている。廊下から直接内部が見えない構成。



1階平面図。渡り廊下脇の2カ所のトイレ改修は第2期工事で行われた。



2階平面図。教室棟(図面下部)のトイレは2階から設けられている。

の学校を共通化させるという認識や設計スケジュール等の都合もあって、おのおのの学校のトイレユーザー(生徒・教職員等)の立場に立った計画は難しい状況でした。

しかし、輝翔館の創設を機会に、使用者や管理者の声とともに、専門家の意見を反映させた設計手法を取り入れることによって、より良い学校トイレ環境を整備し、今後の大規模改築・改造工事の標準指標となるようなモデルを構築しながら、学校環境の活性化を図りたいという認識が生まれていました。

当計画の基軸は、学校(生徒+教職員)・福岡県関連各所・設計事務所・学校のトイレ研究会の4者連携による共同作業を経た合意形成・計画プロセスの充実でした。

このような経緯の中で、これまでに実績の蓄積が認められて参加することになった学校のトイレ研究会に求められた福岡県からの要望事項は以下のようなものでした。

- ① トイレとしての基本的機能を確保すること
- ② 県立の高校・中学として相応しく、過剰仕様にならないこと
- ③ 新しいトイレとして、教育的観点からのアイデアを盛り込むこと(学年をまたがる友和・情報の交換・安らぎの場など)
- ④ 保護者や地域解放など、来客者にも考慮すること

- ⑤ 現状だけではなく、将来も見据えて先進的であること
- ⑥ 維持管理、掃除の仕方までを提案すること
- ⑦ 維持管理のために施設が予算措置する必要があるれば、提案すること
- ⑧ 長期的に生徒に親しまれるトイレであること

このような要望を達成するために、学校のトイレ研究会では福岡千花子が担当者として取り組み、セミナーおよびワークショップを開催することになりました。

### STEP1: 2004年5~6月

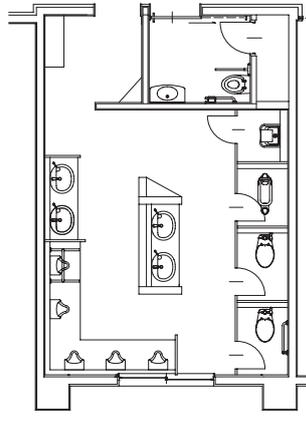
福岡県・設計事務所に対する学校トイレセミナー

まず手始めとして、主導者となる福岡県関連各所のコンセンサスを得るために、学校のトイレ研究会による「学校トイレセミナー」を実施しました。県では立案当初から建築都市部建築設備課機械設備係の田中成二係長が、次いで松藤秀明係長が取り組むとともに、総務部管財課、建築都市部からは営繕課、建築設備課など、多くの職員が取り組み、使いやすく大切にしたいと思われる「学校らしいトイレづくり」をテーマに、プランニングのポイント・建材や設備の選定方法などを紹介しました。

あわせて、今回の対象校である福岡県立輝翔館中等教育学校の改修設計を担当することとなった設計事務所に



教室棟の男子トイレ手洗いは2つのタイプを併用。



教室棟男子トイレ平面詳細図。



女子トイレ入口。



アイランドタイプの手洗いコーナーは、大便ブースと小便コーナーとを視覚的に分離する役割も持っている。



広めの大便ブース内には手すりが用意されている。



ワークショップの風景。主な活動は夏休み中に行われたが、生徒たちは積極的に参加した。

対しても同様のセミナーを実施し、学校側をリードする立場にあるメンバー間での合意形成が図られたわけです。学校設計に手馴れた設計者の面々からも、「今回は従来とは違う意識で取り組まねば……」という声が聞かれました。

## STEP2：2004年7月

トイレP J 発足【学校・生徒への意識づけ・要望点の抽出】

学校のトイレ研究会は、はじめて訪ねた学校で早速トイレ調査を開始しました。長年使い続けられた典型的な5Kトイレは見慣れていることもあって大して驚きはありませんでしたが、明るく元気な声で挨拶をしてくれる生徒たちや、古いながらも整然と使われているトイレに、今後の期待を感じたのも事実です。

いきなり「トイレの話し合いをするから集まって！」といわれ、困惑した様子で姿を見せた生徒たちは19名。黒木高等学校の生徒会を務めている生徒14名と開設間もない輝翔館中等教育学校の美化班のメンバーで1年生の5名でした。さらに輝翔館の尋木啓二事務次長、養護教諭の中尾真樹子先生、黒木高等学校の北原弘宣先生の3名。今回のトイレ計画の主旨を説明した後、「今日から皆さんはトイレプロジェクトメンバーです！」という発

言に、顔を見合わせながら照れ笑いする生徒もいました。

この段階での目的は、学校トイレに対する「汚い・くさい・暗い……」という認識を払拭し、新しいトイレを豊かにイメージしてもらうこと。そして、自分たちの学校のトイレづくりにみんなが参加していくという意欲を沸き起こしてもらうことでした。

新しい他校の事例紹介を交えながら最近の学校トイレ事情を伝え、「どういうトイレをつくりたいか？」という要望・意見を出していただくようお願いをして帰りました。

数日後、学校内で生徒の意見抽出を行い、要望点を整理していただいた結果が届きました。

先日の説明会で紹介した事例などから、自分たちなりに必要だと感じた要素をピックアップし、皆で話し合いながらアレンジしてまとめた結果を見ますと、生徒たちの感性や創造力を大切にしたいという思いが強く伝わってきました。高校生・中学生それぞれからあがった主な声は次のとおりです。

掃除方法はウエット→ドライ式へ

和洋比（中学）男女共3：2

（高校）男1：1／女7：1

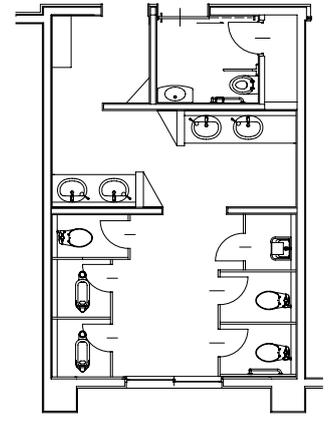
欲しいものはウォシュレット、音姫、全身鏡、温風乾燥機、自動で出る手洗い、ベンチ、荷物置き、身障者配慮。



教室棟の多目的トイレ。基本的な仕様は男女とも同じ。



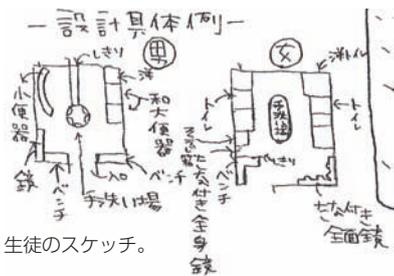
男女とも袖壁にはスリットが設けられている。教室棟女子トイレ平面詳細図。



照明は直接と間接の併用。



女子トイレはふたつの手洗いがゾーンを構成しており、鏡や棚が各所にちりばめられている。



生徒のスケッチ。



図1

### STEP3 : 2004年8月

#### 第1回ワークショップ【生徒たちの要望の具現化】

学校側から出た要望事項をもとに、「生徒案をベースとしたプラン」と「参考提案プラン」の2案を用意して、生徒からの意見を活発に出し合う場を設けました。あくまでも生徒たちの意見を尊重させるよう心がけながら、何を重視すべきか？ 何を断念すべきか？ という判断力や積極性を培うことを狙いとしたものです。

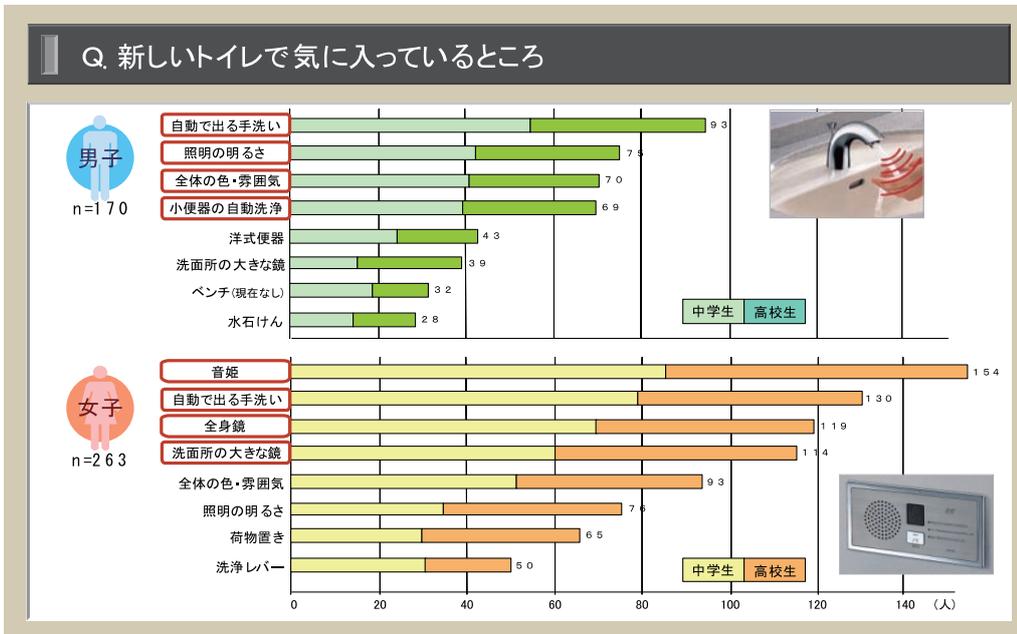
先生方が見守る中、「今はこうだけキレイになったらこうしたい」「高校生と中学生が一緒に使うからこっちの方がいいよ」「デパートに行ったらこんなトイレもあった」「男子は……女子は……」といった生徒たちの間での意見交換が繰り返され、STEP2で出された要望点の整理を生徒たち自らが行う場となりました。(図1)

ただ、残念だったのは輝翔館の生徒たちが参加できなかったこと。これは校区が福岡県全県に及んでいるため寄宿生が多く、夏休みは実家へ帰ってしまっているためでしたが、高校生たちは彼らのことも考えながらワークショップに挑みました。

### STEP4 : 2004年8月

#### 第2回ワークショップ【最終確認・納得の場の提供】

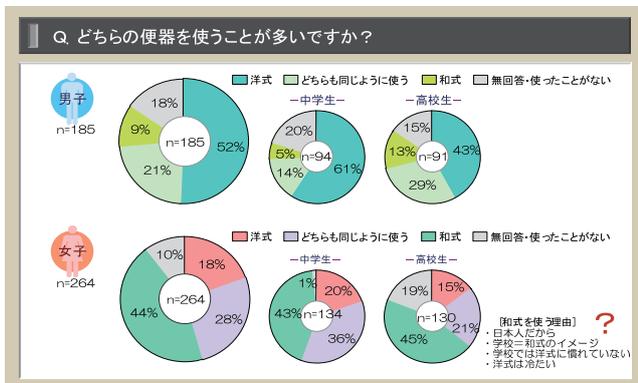
図表 1



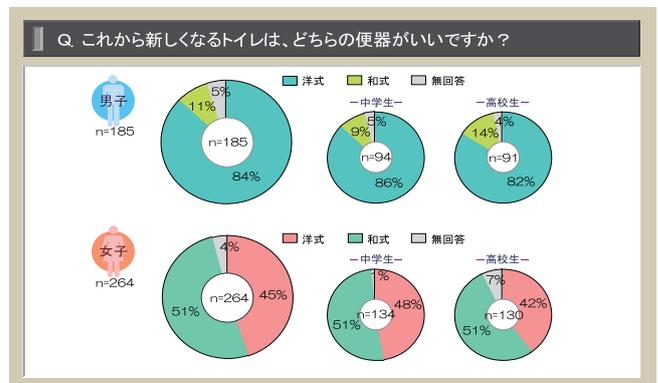
第Ⅰ期改修後のアンケート調査結果より男女ともに、新しくなったトイレの中で人気を集めたのは、使い勝手がよく衛生的な「自動で出る手洗い(自動水栓)」。

その他、さわやかなトイレを望んでいた男子には「照明の明るさ」や「色・雰囲気」といった内装コーディネートに関するものが、プライバシーや身繕いが気になる女子には、女子ならではの「擬音装置(音姫)」や「化粧鏡」などが評価された。

これらは、生徒たちからの要望として、第Ⅱ期計画へも引き続き取り入れられることになる。



改修前の環境を考えると「洋式」の声が高まっていると言える。家庭の洋式率は8割。



ウェット清掃よりもドライ清掃を望む生徒が多く、女子の方が特にその傾向が強い。

前回の検討事項をもとに、最終プランを提示しました。福岡県や設備設計を担当した梅野設計からの維持・管理面でのアドバイスも受けながら、レイアウトや設備機器について、学校側の了解を得る場を設けました。

あわせて、トイレ全体のイメージ・カラーについても生徒たち自身で話し合って決めてもらうなど、このトイレづくりに参加したメンバー全員が最終プランのアウトプットイメージを描き、合意・納得するための時間となりました。男子トイレでは「シンプル(さわやか・清潔)」という言葉が採り上げられ、イメージカラー・キーワード=水色・白・雲、女子トイレでは「ナチュラル(おだやか・ぬくもり)」で、イメージカラー・キーワード:白・ベージュ・木目という結果が導き出されました。

2005年6月 第Ⅰ期トイレ完成

## STEP5: 2005年7月

### 第Ⅱ期計画スタート

完成したトイレについての使用者側の意見を収集し、その結果を次期計画へ反映させるため、全校生徒に対するアンケート調査を実施。生徒側の声・教職員の声を同時に吸い上げることで、使い勝手だけでなく、教育的な視点も含めた効果や反省材料を抽出しました。

生徒たちの改修前後の気持ちの変化から見てきたことをどこまで次期計画に反映させるかについて、現場をよく知る先生方の要望・意見も聞きながら、Ⅱ期の設計が進められました。

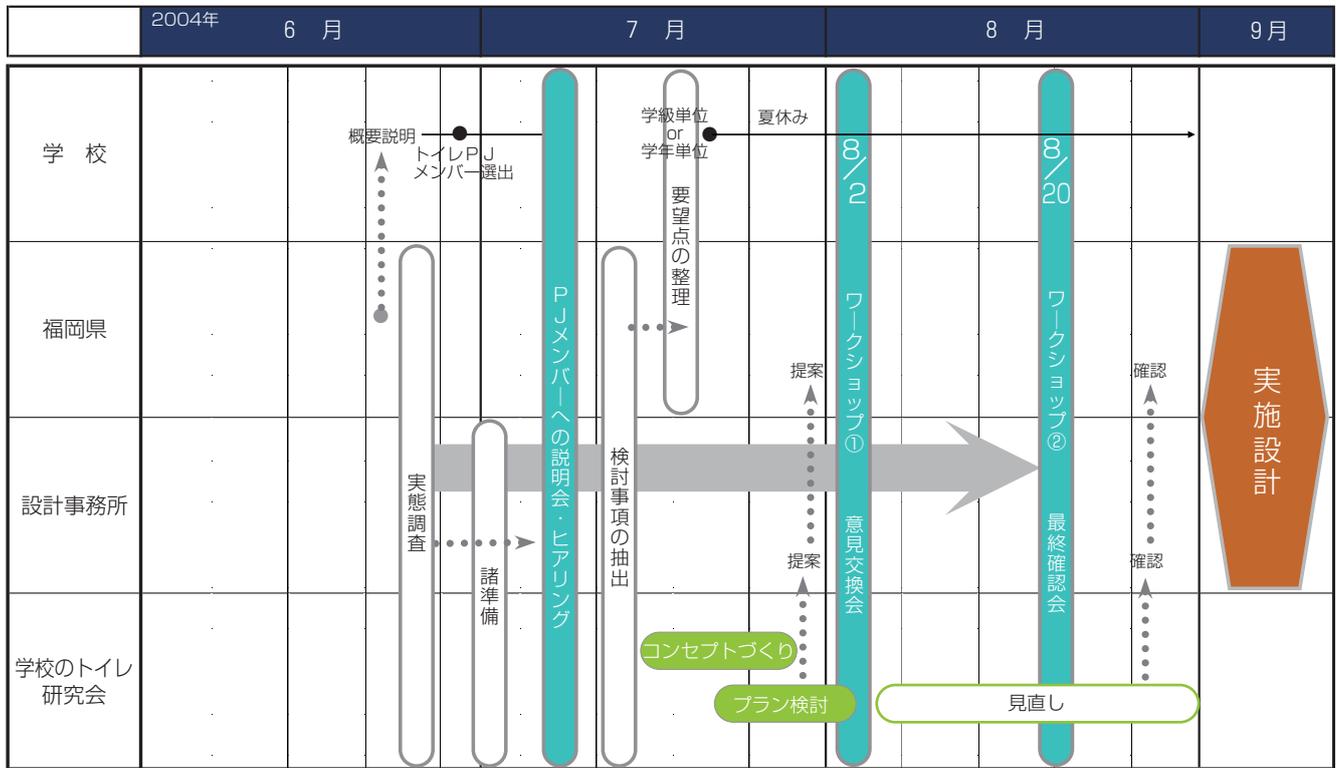
生徒から評価の高かったドライ清掃を継続すること、自動水栓、音姫、鏡といった人気の機能も引き続き盛り込むこと、一方で和洋比については、女子生徒からの和式の要望も残っていたものの、今後の将来的な学校環境の変化も汲みとった上で、全面洋式化にふみきるといった新たな提案も盛り込まれました。(図表1)

## STEP6: 2005年9月

### 福岡県職員に対する報告会

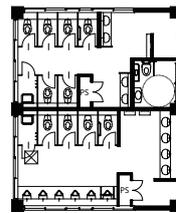
当計画関係者より、福岡県の他部門の方へ今回の取組みを報告する場を設けました。

福岡県の各担当者、設計事務所、学校のトイレ研究会それぞれの立場から、当計画についての設計主旨、期待される効果、今後の課題などについて発表し、それに対する意見交換なども行われて、今後の県内の学校設計へ反映させるべき要点がまとめられました。これは福岡県建築設備課の主催によるもので、福岡県としての意気込みを関連各所に理解してもらうとともに、学校トイレに対

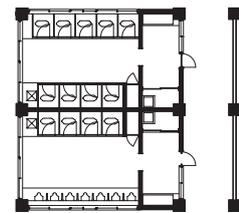


第1期改修工事における学校トイレ計画の手順とスケジュール。

「PJメンバーへの説明会・ヒアリング」では、最近の学校トイレの傾向などを学校側に認識していただき、現状のトイレの問題点・悩みを聞き取りながら、今後の進め方についての意見交換が行われた。次に「ワークショップ1」までの期間で、清掃方法・和洋比・障害者用トイレの有無など、主となる部分を検討し、その後、寸法計画や衛生設備選定に関わる、トイレに必要な要素や機能についての検討を進めた。さらに「ワークショップ2」においては、完成後のメンテナンス体制についても考えながら見直しを行い、あわせて内装材・照明などの仕上げやカラーイメージを検討した。



渡り廊下トイレ 1階平面図。



改修前平面図。

する計画者側の認識統一を図ることを目的とし、今後の計画時の担当者間の横連携を促すことを期待したものです。

2006年11月 第II期トイレ完成

### その後

今回の福岡県の新たなるチャレンジは、私たち学校トイレ研究会の8年間にわたる普及活動がきっかけでした。学校を取り巻く環境が刻々と変化し続ける現在、学校トイレに求められる役割も変わっていくべきものだと感じていた中で、福岡県立輝翔館中高教育学校での2年間にわたる活動は、子どもたちの年齢・性別・地域性に関係なく、教育的視点からの学校トイレの重要性を再認識するとともに、今後の新しい課題やまだまだ拡がり続けるであろう可能性に気づかされたよい機会となりました。

生徒たちの指導に当たった中尾先生は、「完成した後、初めて入った生徒がセンサーで点灯するのを見て、ホーッとって驚いていたのが印象的でした。洋式に対する拒否感もあったようですが、いまでは抵抗なく使っているようです。清掃は班ごとに行い、モップは使いません。ゴム手袋をして雑巾を手で絞って拭いています。中にはゴム手袋なしの生徒もいるほどで、トイレがきれいなところだと生徒たちが感じていることが伝わってきます。



一般教室棟と特別教室棟を結ぶ渡り廊下の中間にトイレが設けられている。この計画は、第1期をもとに、福岡県と設計事務所が計画したものです。



渡り廊下1階の多目的トイレ。

# いつまでも 明るく清潔な トイレづくり のための チェックリスト

小便ゾーン  
手洗いゾーン  
清掃用具置き場  
出入口 編

学校のトイレ研究会監修

「みんなにやさしい学校トイレのつくり方」「照明計画のチェックポイント」は Vol. 8、「トイレ全般」「大便ブースゾーン」は Vol. 9、「学校のトイレメンテナンス」に関しては Vol. 6～8 をご覧ください。

## 小便ゾーンをどのように計画するか

### 感受性が強い年代の感性に応えられる計画を

従来必要個数の器具を設置すればその目的を達成していた小便ゾーン。そのスペースについて最近では利用者満足の視点から、新築リニューアルを問わず従来の計画を見直す動きがでてきました。

見直す動きとはいかなるものか、従来の小便ゾーンの考え方と比較しておく必要があります。器具についていえば

1. ストールのない、一般にチューリップ型と呼ばれるものから、ストール付きに
2. 洗浄装置は押しボタン式のものからセンサー式自動洗浄タイプに
3. 汚垂れ石の設置
5. 体格の変化に合わせた便器間隔の拡大などが挙げられます。

これらの理由のひとつとして、新聞の社会人に対するアンケートでは、小便器の間に仕切りが欲しいと答えた社会人が8割であったという結果からも、ストール付き小便器の必要性がわかります。

押しボタンは不潔感から押さない人がいて、臭気や尿石の固着につながりやすく、節水やメンテナンス性の向上のためにも自動化が適切でしょう。

また汚垂れ石の設置は水を流さない乾式清掃に替えた時、拭き掃除で済むため小便器下の汚垂れ対策にな

ります。

体格の変化については、小学校高学年になると成人並みの身長の人もいて、便器間隔も成人の寸法に合わせる必要がでてきますし、また地域開放を考えた場合にも成人の寸法を考慮する必要があります。

上記のように仕様を変えることは重要ですが、それだけでは利用者の真の満足につながらないと考えるのが、最近の傾向です。

右ページ中央の写真をご覧ください。隣の視線が気になるという問題を、放射状に小便器を配置することで解消させています。またカバンのような大きな荷物も置ける棚と仕切り板も円形の平面を切り取ることで個別空間として実現させています。

さらに特筆すべきは暗くなりがちな前面の壁をウォールウォッシャータイプのダウンライトで柔らかく演出している点です。

人々の感性は不変ではなく、取り巻くあらゆる環境により移り変わっていきます。成人においても心地よく用を足すことが精神衛生に好影響を与えることは周知の事実ですが、感受性が強い年代の児童や生徒においては、なおさらだと思われます。その感性に答えられる計画を小便ゾーンにおいても行うべきでしょう。



宝塚市立御殿山小学校の男子トイレは、隣り合っていた男女のトイレを一体化し、大きく空いた中央部に鏡とベンチを組み合わせたスクリーンを設置して回遊動線をつくり、あわせて大便ブースとを視覚的に分離している。

#### 壁掛型

便器は壁で支持され、床からは浮いている。低リップタイプは大人から子どもまで幅広く利用できる。床の清掃性が良い。



#### 床置型

床から立ち上がったスタイルの小便器。

## 小便器のレイアウト

### 使いやすく安心して用が足せるように

小便器のレイアウトは、使いやすさや安心感にも影響しますので、慎重に計画したいものです。

とはいえ、いろいろと制約があり、なかなかベストな位置を決めるのは難しいと思われます。しかし、小便器のレイアウトによって、快適なトイレ環境をつくることも可能です。

まず、平面的に考えて見ましょう。入口や大便ブース、手洗いなどの位置関係をどうするかを決めなくてはなりません。

使用頻度を考えますと、大便ブースよりも入口に近いほうがよいように思われます。しかし、入口から丸見えでは落ち着いて用を足すことができません。入口との位置関係によって位置を決めるのがよいでしょう。

最近ではトイレの出入り口に扉をつけない傾向が多く見られます。出入り口は廊下に直結しているものが多く、廊下の通りがかりに小便ゾーンが目に入らないような配置も心がけたいと思われます。

大便ブースは囲まれているので、配置にはある程度の自由度がありますが、小便ゾーンでの小便器のレイ

アウトは、さまざまな条件を考えながら行なう必要があります。

小便器は壁に設置されて、一直線に並んでいるのが一般的です。これは器具を設置するための技術的な関係で、自立できる小便器はほとんど存在しません。ですからどうしても壁に沿って配置されることになります。

スペースや必要個数との関係から、L字型や背中合わせに2列並んだ小便器のレイアウトも見受けられます。L字型のレイアウトの時には入隅部分がデッドスペースとなりやすいので、そこにパイプスペースを持ってきたり、物を置く棚にするなどのアイデアが必要となります。

多感な少年時代は、隣りからのぞかれることに対して羞恥心をもっています。そのため、境の壁を高くして欲しいという要望も聞くことがあります。落ち着いて用を足せるためにはどのような環境が相応しいかを考えることも大切です。男子トイレもすべて洋式便器にしてブース化するという例もありましたが、円弧状の配置によって対処した例もあります。ただし、この場合にはデッド

スペースが生まれやすい難点を、どのようにクリアするかが課題です。

また、大便ブースと小便ゾーンとの間に、ベンチや物を置く棚を兼ねたパーティションを設置した例は、大便ブースを使う子どもに対する配慮のほうに比重がありました。

目の前に見えるのが、壁か窓かによってずいぶんと気持ちも違います。窓から景色が見えると開放感があって気持ちがいいと感じる場合もあります。目の前が壁ならば、閉塞感を感じる場合もあれば落ち着くこともあると思います。

どちらかにするのではなく、選択の余地があるとよいのでしょうか、新築ならばともかく、改修の場合にはそうもいってられないのが現状です。

そんなときには、小便器回りに絵を飾ったり花を活けたりして演出するのもひとつの方法です。

いずれにしても、安心して用が足せること、そして手元が暗くならないような小便器のレイアウトや技術的なサポートが重要です。

円弧状に小便器が配置された例。



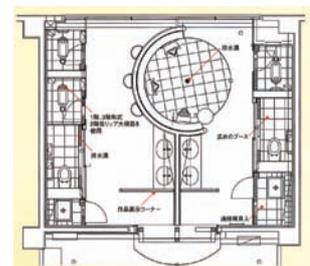
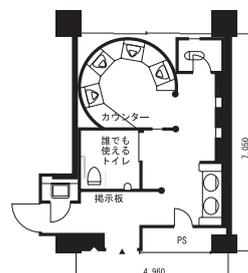
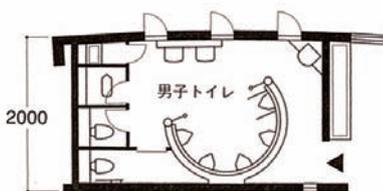
砺波市立出町小学校の高学年用男子トイレ。壁面に使われているタイルは、オランダをイメージとしたパターンや色彩を選定。



横須賀市立大矢部中学校の小便ゾーン。小便器の間には棚が設けられている。



世田谷区立山崎小学校の第一次改修では、汚れやすい部分以外には木材を用いており、子どもたちに好評。



## 体格差への配慮

### 汚れ防止のためにも必要です

小学校から中学校までは成長期です。小学1年生は幼稚園を卒園してすぐですし、中学3年生ともなれば大人も顔負けの体格となります。この体格差を考慮しないと、とても使にくいトイレとなってしまいます。

一方では、家庭では大人といっしょのトイレを使っているのだから、とくに配慮する必要はなく、それに慣れるようにするべきであるという意見もあります。

しかし、学校と家庭では環境が違います。やはり年齢や体格に相応しいトイレを用意したいものです。

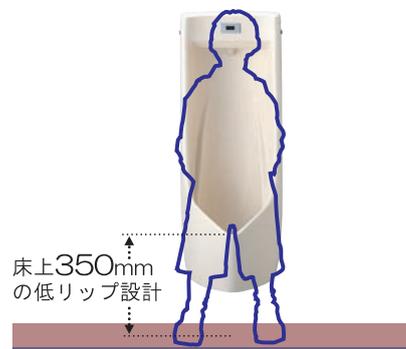
また、学校ではトイレを使う学年を限定できる場合もあります。とくに小学校では低学年、中学年、高学年と、それぞれゾーニングされることが多いので、それぞれの場所に相応しく対応することが、子どもたち

にとって使いやすいトイレをつくる上で大切な配慮ではないでしょうか。

子どもだから小さい小便器でと考えてしまいがちですが、子どもたちの安定しない動作では、的が小さくなればなるほど、的を外す可能性が増えます。子どもであっても、ゆったりとした開口部を確保した小便器を選定することが必要です。

また、オシッコをしっかり小便器内に収めるためにはリップ（前方に張り出した受け部）の高さが影響します。体格差に関わらず使えるよう、リップの高さを考えて選択します。

小学校、中学校の中でも学年によって、体格（身長）は大きく異なります。それに伴って「使いやすいさ」も異なります。年齢別の「使いやすいさ」についての検証を行いました。その結果が下の表です。



低リップ小便器下と床の間に100mm程度の空間を確保すると、床清掃のときにモップが入る。



リップの高さが適正な例。



リップが高すぎると、大人と比べて身長の高い子どもにとっては姿勢が安定しない。

### 小便器のリップの高さ

- 使いやすい
- 使える
- × 使いづらい

		床置型	壁掛型	壁掛型
小学生	1年生 男子 (113cm)	●	○	×
	3年生 男子 (129cm)	○	●	○
	6年生 男子 (150cm)	○	●	●
中学生	1年生 男子 (151cm)	○	●	●
	3年生 男子 (165cm)	○	○	●

小学生（低学年）の場合：壁掛型小便器が最適

中学生（高学年）以上の場合：成人と同様の壁掛型小便器が最適

\* 子どもから大人まで、幅広く利用する場合は、壁掛型低リップ小便器（リップ高さ350mm）がお勧め。

#### ● 調査概要

時期：1998年8月

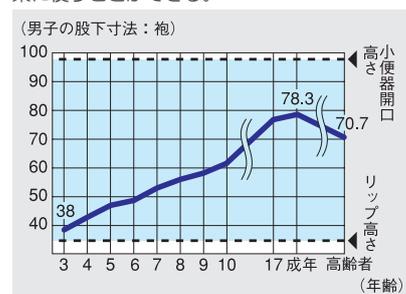
対象：小学1年生、3年生、6年生

中学1年生、3年生 各男女1名ずつ

条件：全国の平均身長に即している児童・生徒

検証内容：3段階の高さを設定し各学年の使用状況を検証。「使いやすい」「使える」「使えない」の3段階で評価

3歳児の平均股下寸法は約38cm。低リップタイプ小便器は学校や公共施設のトイレをひとりでする就学年齢未満の子どもから大人まで、楽に使うことができる。



データは下記から引用して構成。

- 1973年度「乳幼児身体計測報告書」
- 1995年度「国民栄養調査データ（男子）」
- 1985年度「学校保健統計調査報告書（男子）」
- 1996年度「学校保健統計調査データ（男子）」
- 1991年度「設計のための人体寸法データ集」

## 小便器回りの床仕上げ

### まずは汚さない配慮、そして清掃しやすい素材を選択します

小便器の周辺は思いのほか尿が飛び散ります。仮に的を外さなくても、ある程度は飛散してしまうのです。それが蓄積して悪臭の元にもなるので、清潔さを保つためにはそれなりの配慮が欠かせません。

よく見かける小便器下の汚れの原因は、外から持ち込まれる砂や泥、そして便器から跳ねだした小便です。

おこぼしをしないように小便器に近づくよう、便器下・便器手前の床材の色を、他の部分の床材の色と変えるのもひとつの方法です。色彩の違いによって、前まで進むようにと立ちエリアを示すサイン効果が生まれます。とくに低学年の場合は有効と思われます。

また、もっと積極的に、汚垂石に足のマークを描いて、立つ位置を指定している例もありました。

小便器下の床を数センチ上げて、強制的に近づけるようにする例もありますが、これは清掃性の上からは

疑問があります。段差の入隅に汚れがたまりやすいからです。

なお、トイレ内の床材は全般的に吸水性が少なく、目地の少ない材料を選ぶことが重要ですが、とくに小便器下はこぼしやすい部位なので、目地を避けて施工し、清掃しやすい床材を選ぶことが重要になります。

材質的には焼き物タイルとプラスチック系のビニル床シートがあり、表面が鏡面で艶があるほうが汚れが落ちやすいといえますが、グラウンドや開放ゾーンのトイレでは、雨水や泥の持ち込みが多くなり、床面が傷つきやすく滑りやすくなるので、焼き物タイルは無釉タイルの磁器質またはせつ器質タイルを、ビニル床シートは平滑防滑床シートがおすすめです。

一般教室ゾーンのトイレは外部からの汚れ物質の持ち込みが比較的小さいので、焼き物タイルは施釉タイルを、ビニル床シートはワックス掛け不要の耐汚染性ビニル床シートを

お勧めします。

なお、床材の目地は汚れ溜りになりやすいので、焼き物タイルは大判とし、小便器と小便器の間で目地を取るようにします。ビニル床シートも同様の箇所目地を設けるようにします。

小便器下に汚垂石を敷くのもひとつの方法です。石という字がついていますが、素材としては石だけではなく、陶板や科学素材などさまざまですが、なかには抗菌処理や防汚処理をしたものもあります。

いずれにしてもこぼすのは使用者ですから、こぼしたらこぼした本人が拭く習慣付けも大切ではないでしょうか。

なお、トイレ全体の床に関するのですが、たとえ乾式清掃であっても、水を流して清掃する必要がある場合も考えられます。その意味では防水処理とともに、排水口を確保しておけば万全でしょう。



緩やかな円弧状に配置された小便器に沿って、汚垂石が敷かれている。外にこぼさないように、汚垂石に立つ位置がマーキングされた、岡山市立庄内小学校の男子トイレ。



小便器下に大判タイルを敷き詰めた、札幌市立資生館小学校。



壁掛型小便器と防汚陶板で掃除しやすく清潔に。



L字型に配置された小便器と汚垂石。デッドスペースとなるコーナー部分には小さな棚が設けられた宝塚市立光明小学校。棚にスポットライトが当てられた楽しい演出。

## 小便器に手すりをつける

### 使うのは障害のある子どもだけではありません

誰でもちょっとした不注意でケガをすることがあり、時には骨折なども起こります。そんなときにも安心してトイレに行くためには補助具が必要となります。

とくに注意したいのは、骨折などは一時的なもので、松葉杖などの使用に慣れていないことです。したがって身体障害者以上に気を配る必要があります。

また、最近では障害があっても、希望されたら学校は受け入れる体勢をとる必要があり、さらには学校施設の地域開放が進んでいるためにも、トイレにおける補助具の設置は必要不可欠なものとなっています。

小便器に設置する手すりにもいくつかのタイプがあります。その選択とともに、入口に近い小便器に設置するのか、あるいは奥のほうに設置するかも検討しなければなりません。使い勝手からは入口に近いほう

がよいのですが、手すりがあったり使用者の動作が緩慢になるため、出入りする他の子どもたちの邪魔になることも考えられます。できるだけ入口に近く、しかもトイレ内の動線が混み合わないような位置の小便器に取り付けるのが理想的です。

また、必要になったら取り付けられるように、しっかりとした下地を用意しておく方法もあります。障害を持つ子どもが進級するに連れ、器具だけを移動して対応します。

### 設置しておくと便利

小便器回りに対する配慮として、例えば松葉杖を使っていると、持ち物の置き場に困ります。日常的にも音楽や体育などの授業で教室を移動することもあります。そのためのために荷物を置いたり掛けたりするような棚やフックなどの備品があると、誰にとっても便利です。

## 小便器の間隔

### ゆとりをもってレイアウト

小便器の間隔が狭すぎると隣りが気になります。かといって十分な間隔を取るためには大きなスペースが必要となります。

小便器の間隔については決まった寸法というものはありません。必要な数を限られたスペースに入れるために、どこまで近づけられるか、という考え方がこれまでのやり方でした。しかし、最近になってトイレ環境が見直されるようになり、再考されるようになりました。

最近では少子化によって定員が減少し、学校トイレの改修時には便器数を減らすことが可能となり、それがトイレ環境の向上につながってきているのは皮肉かもしれません。

その意味ではゆとりのある計画ができるようになりました。

小便器間に設置される間仕切りは、清掃面からは適切な対応とは考えられません。スペースに余裕がある場合には、隣を気にしないで使用できるよう、十分な間隔を確保することが望まれます。

必要に応じて間仕切りを設置する場合には、スペース的なことを考えればなるべく薄く、丈夫で耐久性があり、清掃性のよい素材を選択することが必要です。

また学校の地域開放に対応できるよう、幅広い年齢層の利用が見込まれるトイレに関しては、大人にも使いやすい間隔とすることが望ましいでしょう。

### あると便利なパーツ



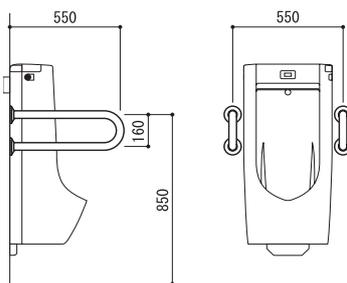
傘や手袋などを掛けるためのフック。荷重を考慮して選択する。



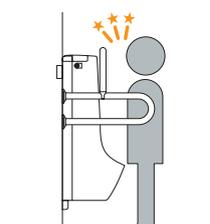
壁に取り付ける棚。マグネットが付いており、使用しないときには折りたたむことができる。



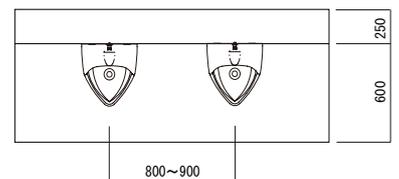
適正位置のモデル。



小学校向け小便器用手すりの形状と推奨設置位置。



成人用手すりでは、身体を預ける胸当てが顔の前にきてしまい、使いづらい。



小便器の間隔については、トイレの広さと必要個数によって決められてしまうことが多いようだが、子どもだけしか使わないという状況は少ないと思われる。できるだけ大人も子どもも使えるように配慮したい。その意味で小便器の間隔は800mm以上あれば妥当だと思われる。

## 手洗いゾーンのタイプ

### アイランドタイプか壁付けタイプか

従来のトイレはスペースが狭く、また配管の取り出しなどの施工性から、洗面器の配置は壁側に並列されるのが一般的でした。最近は児童・生徒数の減少から既設のトイレの器具数にゆとりが生じ、改修時に隣り合わせた男女トイレを一体化して男子もしくは女子専用として、ゆとりのあるプランニングが可能になりました。

しかし、床面積は増えるのですが、壁量はそれほど増えず、壁に沿って便器やブースを配置すると、手洗いゾーンを壁から離してアイランドタイプとしたほうが空間効率がよくなります。

また、広く空いてしまった中央部に手洗いを置くことは、空間の使い方としても上手なやり方だと思われま

す。そういう意味では必然的に生まれた形式かもしれません。しかし一方では新たに配管しなければならない

など、工事には多少手間がかかりますが、場所が自由になること、自由な形がつけられることなどから、快適なトイレをつくるためにはメリットとなっています。さらに、トイレの中央部に設けることによって、動線を整理することもできます。

アイランドタイプの手洗いは、円形をはじめ自由な曲線を用いたり、カラフルな素材を用いたりして、トイレ内に楽しげな雰囲気をつくることのできるためにコミュニティーを醸成しやすく、子どもたちにも好評のようです。

ただし、四方から使えるよさとともに、下手をすると四方に水が撥ね飛んでしまうというデメリットもあります。また手洗い石ケンの飛散なども考慮に入れますと、防滑性のある床材を選択しておくほうが安全だと思われま

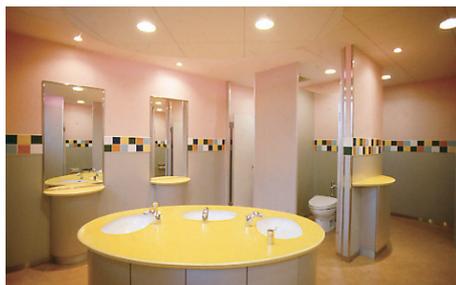
す。一方、改修時における壁付けタイ

プのメリットは、新たに配管をしなくてもすむことです。その分、カウンタートップに清掃しやすい素材を選択したり、カラフルな材を使って明るく楽しい雰囲気を演出したり、高さを変えて幅広い年齢層に対応できるように配慮したいものです。

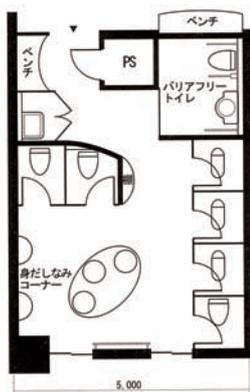
スペースが狭い場合には、省スペースタイプの手洗器を選ぶことによって、空間にゆとりを持たせることができます。

いずれにしても、車いすでの利用を考慮すると、カウンター下には何もないほうがよいのですが、すべてを空けておく必要もないと思われる場合には、手洗いのカウンター下をトイレトペーパーの保管場所として利用するなど、いろいろと使い方にアイデアが活かせるところでもあります。

スペースが十分取れないときには、省スペースタイプの手洗器を採用すると、空間に余裕ができる。上はそのモデル。下はカウンターの奥行きを抑えた豊中市立千成小学校低学年用の壁掛型手洗いゾーン。



アイランド型手洗いが設けられたトイレの例。上は太田市立東中学校女子トイレ、右上は砺波市立出町小学校中学年男子トイレ、右下は豊中市立千成小学校女子トイレ。



太田市立東中学校女子トイレ平面図。

# 使いやすい快適な手洗いゾーン

## 体格差や水の撥ねなどに配慮します

手洗いカウンターの高さも、小便器同様、利用する子どもたちの年齢に対応した配慮が求められます。

最近では清潔性ととも、省資源を目的として自動水栓の採用が進んでいます。止め忘れがないのもメリットとなっています。

手洗いでいつも問題になるのが石ケンの置き場です。O 157 の事件以来、手洗いが積極的に推奨されています。ところが学校では管理上の問題からか、ほとんどがみかんネットの中に石ケンを入れて、水栓からぶら下げています。確かに水切れはいいし、小さくなくてもすぐにわかりますので、機能的には優れているかもしれませんが……。何かよい方法を考えたいものです。

洗面器は水を流したときに撥ねが少ない形状のものを選ぶようにします。細かいことですが、水栓からの水が排水口に注ぐように、水栓との

位置関係を設定するとベストです。

手洗いゾーンには水栓、洗面器、石ケン、鏡がワンセットになっていると思われがちですが、鏡だけは別に考える必要がありそうです。



体格差に配慮した段差のある手洗いコーナーが設けられた戸田市立徳目小学校女子トイレ。



自動水栓は止め忘れをなくして水のムダ遣いをなくすとともに、直接手を触れなくて住むので衛生的にもお勧めです。

これまでは顔が映る程度の大きさの鏡が水栓ごとに設置されている例が多かったのですが、最近では全身が映るような大型の鏡を設置する例が増えてきました。

水栓の前だけに鏡を設けると、身だしなみを整える間、ひとりが水栓を占領してしまい、次の子どもが手を洗うことができません。そのような場合には、水栓の位置とはずらして鏡を設置すると効率的です。

手洗いゾーンを清潔に保つための方法として、ハンドタオルをおいてある学校を見かけました。手洗い周辺が濡れていても、なかなか自分のハンカチで拭くのは難しいと思います。また、そのたびに清掃用具置き場から雑巾を持ってくることも面倒でしょう。その点使用後に、備え付けのハンドタオルで拭う習慣をつけることで、いつもきれいな手洗いゾーンを保つことができます。

手洗いゾーンは、比較的装飾しやすいところでもあります。季節に合わせて花を飾ったり、クリスマスやお正月、端午の節句など、年間行事にふさわしい飾り付けをすることもできます。横須賀の小学校では、PTA が協力してトイレの美化運動に取り組んでいるところもありました。トイレを軸として、地域づくりや先生、児童・生徒、PTA 相互のコミュニケーションの場として利用しているのです。



トイレ内をまとめるために設定されたテーマカラーに沿ってデザインされた横須賀市立大津小学校の手洗いゾーン。観葉植物などの装飾はPTA が定期的に参加して、快適なトイレを維持している。

## 洗面カウンターの高さ

- 使いやすい
- 使える
- × 使いづらい

		600mm	650mm	700mm	750mm	800mm
小学生	1年生 男子 (113cm)	○	●	○	×	×
	1年生 女子 (114cm)	○	●	○	×	×
	3年生 男子 (129cm)	×	○	●	×	×
	3年生 女子 (123cm)	×	○	●	×	×
	6年生 男子 (150cm)	×	○	●	●	×
	6年生 女子 (148cm)	×	○	●	●	×
中学生	1年生 男子 (151cm)	×	×	○	●	○
	1年生 女子 (152cm)	×	×	○	●	○
	3年生 男子 (165cm)	×	×	○	●	●
	3年生 女子 (158cm)	×	×	×	○	●

小学生（低学年）の場合：650mm～700mm が使いやすい

中学生（高学年）以上の場合：750mm～800mm が使いやすい

### ●調査概要

時期：1998年8月

対象：小学1年生、3年生、6年生

中学1年生、3年生 各男女1名ずつ  
条件：全国の平均身長に促している児童・生徒

検証内容：3段階の高さを設定し各学年の使用状況を検証。

「使いやすい」「使える」「使えない」の3段階で評価

## トイレをきれいにするためには清掃用具置き場もきれいに

### 清掃用具置き場は意外な盲点です

トイレをきれいに保つためには、日常の清掃がもっとも大切です。生徒や児童がトイレ清掃にかける時間はどこでも平均して15～20分くらいで、1室につき3人体制というのが全国的な平均です。(詳しい清掃の方法等につきましては、小誌 Vol. 6～8 でご紹介しましたのでご参照ください)

この清掃体制で考えますと、必要な備品は以下の通りとなります。

ちりとり	1
ほうき	1
バケツ	1
雑巾	3
洗剤	1 (360ml 入)
モップ	1
床ブラシ	1
便器用棒タワシ	1

既存の清掃用具置き場は、狭く使いにくいという現状が多く見受けられます。清掃用具が狭く暗いスペースに、乱雑に詰め込まれていたのでは、清掃用具自体が汚く見えてしまいますし、清掃意欲もなくなります。また、清潔さを保つためにも、清掃用具置き場は常にきれいに整頓しておきたいものです。

掃除が終わった後に、雑巾やモップが絞られきれいなまま用具入れに入っていると、雑菌が繁殖しやすくなりますし、悪臭の発生原因ともなります。

清潔に保つためには、必要な用具類のサイズや数量を把握して、必要なフックや棚を用意し、いつもきれいに片付いているようにします。

学校によっては清掃用具を洗うためのシンクが掃除用具置き場とは離れた場所に取り付けられている場合もありますが、このような場合にはシンクの近くに清掃用具置き場を設置するか、あるいは壁面を利用して雑巾やモップを掛けられるようにする方法もあります。

また、トイレ内の照明器具から光が届きにくいところに位置している場合もよく見かけますが、そのような場合には大便ブースのように、専用の照明器具を設けるとよいでしょう。扉と点滅スイッチのセンサーとが連動していると消し忘れもなく、省エネルギーにもなって便利です。

また、あえて扉をつけずに、コーナーを利用して掃除用具や洗剤、トイレットペーパーの予備、シンクな

どをセットする方法もあります。こうしますとすっきりと整理できますし、日常的にも目が届くので、きれいに保つことができます。

とくにトイレ回りに十分なスペースを確保できないときには、コーナー部を掃除用具置き場に利用すると効果的です。

扉の裏に清掃の手順や備品のチェックリストなどを貼っている学校もかなり見かけました。誰が掃除当番になっても、きちんとした清掃ができるようにと、先生たちが考えた方法です。トイレ清掃に慣れている子どもたちばかりではないので、よい方法ではないでしょうか。



コーナーを利用したオープンな清掃用具置き場のモデル。



戸田市立喜沢小学校女子トイレの清掃用具置き場の扉には清掃手順が貼られている。



きれいに整頓されている世田谷区立富士中学校女子トイレの清掃用具置き場。



コーナーを利用した戸田市立笹目小学校の職員用トイレの清掃用具置き場。

## わかりやすく入りやすいトイレの出入り口

### バリアフリーや視認性だけではなく、みんなが参加できるような配慮もできます

#### トイレと廊下の間には扉は必要か

昔の学校のトイレには、必ずといってよほど扉が付いていました。これはトイレを利用する生徒たちのプライバシーを守る必要があることももちろんですが、トイレの臭いを廊下にもらさない目的がありました。

かつては大便器は和式が多くて汚れやすく、清掃も床に水を流して洗う湿式トイレが多かったので、今と比べて臭いトイレが多かったのです。

水洗化される以前はトイレは臭いところだったので、トイレに扉を設けるのは当たり前でした。

水洗化されて洋式化が進み、清掃も乾式に変わってきた現在のトイレでは、入口に扉を設けることは少なくなりました。しかし廊下から直接ブースや小便器ゾーンが視線に入らないようにクランク状に壁を設計したり正面に間仕切を立てるなどの配慮が必要です。

また、扉を付けたり複雑な入口にすることは防犯上好ましくありませんので、ある程度簡単に先生が中をのぞけるつくりをすることをお薦めします。

#### トイレと廊下の段差は

トイレの段差は、前項同様に以前

は湿式トイレで水が廊下に流れ出ないように必ず付いていました。水洗いが不要になったトイレでは、入口段差の必要性はなくなったと思われます。バリアフリーの観点から考えるとできる限り段差はなくしたほうが好ましいと考えられます。

なお、できれば廊下からトイレ方向にわずかでも勾配をつけておくと、いざというときに水洗いしても廊下に水が流れ出す危険性が少なくなります。

#### トイレのサインは見やすいだけでは

私たちは日常生活の中で扉から出ようとする人の姿をした緑のサインを見ると非常口であると認識します。同様に立った男性の青い姿と女性の赤い姿のサインを見ると自然にトイレと認識します。ただ男性（青）と女性（赤）の形（色）をしたものでトイレと認識するのは、よくよく考えると不思議なことです。家庭以外では常にトイレにはそのように表示されているので、共通の認識となっているのです。

サインについては、このように形や色で見える人に理解してもらうことが重要です。色は、視覚障害のある

人には判別できないこともあるので形ですべてを理解してもらう必要があります。多目的トイレでは、車椅子、赤ちゃん、オストメイトのサインなどが付けられ、その利用設備の内容を表現しています。

このように私たちの生活の中でトイレに限らず、エレベータ、エスカレータなど共通認識ができるものは、逆に文字による表示がなくても通じるのです。

すでに多くの学校で参加型のトイレづくりに取り組んでおり、ピクトサインを子どもたちに任せている例も多くありました。比較的誰にでも参加しやすい方法なので、これからのトイレづくりにも取り入れられるのではないのでしょうか。

また、サインは常に固定されている必要はなく、簡単に取り外しができるようにしておくと、トイレを利用する学年が変わるときや季節の変わり目など、いろいろな機会を見つけては新たなサインをつくることも可能です。このような仕掛けによって、つねにトイレに気を配る習慣づけることもできるのではないのでしょうか。

なお、サインの設置位置や向きなどは、見やすさや誘導性を考慮して取り付けることが必要です。



松伏町立松伏中学校の廊下には、生徒たちがデザインしたトイレの入口を示すサインが施されている。



宝塚市立光明小学校は男女のトイレ入口の間にニッチが設けられ、生花で空間を演出。



太田市立東中学校のトイレは、男女隣り合わせだったものを専用とし、不要となった入口にベンチを設けている。